慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 歴史と辯證法(高橋里美著, 岩波書店) |
| Sub Title | |
| Author | 宮崎, 友愛(Miyazaki, Tomoe) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1939 |
| Jtitle | 史学 Vol.18, No.1 (1939. 9) ,p.174- 178 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390900-0174 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

パリよりの一通の如きは、『情あり、理あり、涙あり、笑いあり。云々』と博士も言はれてゐる如く、讀む人をして感動せしむるものがある。最後に子爵の傳記資料編纂に就いて述べられてゐる項は、史料の蒐集編纂を如何になすべきであるかを實例を以て示されたもので後學の者を稗益する點が多々存すると思ふ。此外、錢湯の話もあり、時にふれた隨筆もあり、又英語、國漢文の教授に對するすぐれた意見も述べられてゐる。

面白く讀めて且つ益せらるゝ所の最も多いものが最も價値ある書物であらう。以上の簡單な紹介に依ては、本書の面白みも有益さも傳へることが出來ないけれども、かゝる意味に於て本書は必ず讀者に滿足を與へるものと思ふ。風呂敷と書物とを示したこつた裝釘、挿入された種々の圖版等すべて博士の書物に對するこまかい愛著心を感ぜしむるものがある。書物を好む人、好まざる人共に一讀すべき近來の好著である。（今宮新）

## 歴史と辯證法（高橋里美著　岩波書店）

本書は「全體の立場」「體驗と存在」につゞく高橋教授の第三論文集である、收むるところ「歴史に於ける辯證法」「歴史の分散性」「理想主義の人生觀」「西田哲學について」「種の論理について」の五篇である、右の中歴史に直接關係するものは前二者であり、他は辯證法に關するものである。

さて第二論文「歴史の分散性」に於て教授は歴史的存在の諸層と其等の間の分散的聯關を明かにしやうと努められる、教授によれば廣義の歴史は非本來的な歴史としての自然史と本來的な歴史としての人類史に分たれ、しかも人類史は更に政治經濟史と精神文化史とに細分される、そしてこの三つの歴史層は分散性と限定性とを示してゐる。ここに所謂歴史層の限定性とは相互限定性であつて、觀念辯證法や唯物辯證法の主張する如く決して一方的限定ではない、そしてこの限定の仕方或は反映の形式は教授によれば不規則分散的である。其は並行的に行はれるのではなく多くは凹凸的に行はれるのである、自然史の層が一樣に政治經濟史の層を限定し、其が又同樣な仕方で精神文化史を限定すると云ふ如きものではなくして、一つの歴史層が他の歴史層を强く突破する如き仕方で限定することもあれば、或は其とは反對に他の層に對して極めて無頓着に游離的に自已の進行を辿り、あまり影響し合はぬこともある、これは其等が分散的であるからである、かかる歴史の分散性と云ふ如きことは極めて常識的であるとの誹をまぬかれぬかも知れないが、然し常識の世界を其の特色に於て把握することは、常識についての哲學ではあつても、必らずしも所謂常識哲學として決して輕蔑せらるべきものではない、勿論哲學は單なる常識に止まるべきではないが、然し常識をも説明し得るものでなければならない。教授は歴史の分散性なる常識に哲學的根據を與へやうと試みたと云ふのである。歴史は分散的存在なのである。勿論教授は歴史に連續的生成を否定するのではなく、寧ろ此を歴史の基層と考へてゐられる如くであるが、具體的な歴史はこの根本的生成――これとても嚴密には第一次的分散性を有する――を基層とする重層的存在なのである。然らば分散性を以つて歴史の

有する根本的性格とみる見方と其の辯證法的な見方との關係は如何であらうか。

歴史的存在を辯證法的とみ、これが把握は辯證法によらねばならぬとみることは我國現代の歴史哲學の一般的傾向と見得るであらう。然し歴史現象を些細に觀察するならば、辯證法的解釋のみを以つてしては決して滿足し得ないもののあることは否定し得ないところである。歴史的存在の基底をなすものは時間的生成であるが、この時間的生成は前辯證法的なものであり、歴史に於ける辯證法はこの非辯證法的地盤の上に成立するものであり、歴史の上層に於ては種々なる形態の辯證法が成立し得ると考へられるのであつて、本書の第一論文「歴史と辯證法」は其の主要形態について論じてゐる。

さて教授が歴史に於ける辯證法として第一にあげるところのものは生成的辯證法である、其は歴史の轉換期に示される辯證法的性格を有する、然しながらこの歴史の轉換、例へば或る文化形態、或る時代精神と云ふ如きものは、一朝にして完成するものではなく、其に先き立つ漸次的發展の結果として發生するものである、かくて生成の辯證法は其の根抵に於て基底的な連續的生成につらなるものであつて、其が辯證法的轉化の如くみえるのは歴史的生成の上層に於てのみであることは注意を要する點であらう、ところがこの生成的辯證法は教授に於て運命的又自然的辯證法と呼ばれてゐる、其は一民族の隆盛、一つの文化形態の完成は、其になるものの自發的努力を要求するもので、決して自然的運命に委ねらるべきものではないが、然しこれを大觀すれば其にも限度があつて結局運命的な過程を辿ることをまぬかれないからである。

次に教授が歴史に於ける第二の辯證法としてあげるところのものは矛盾の辯證法又は爭鬪の辯證法である、ここに於ては對立は生成の辯證法に於ける如く繼起的ではなく却つて同時的である、同時的なるが故に空間的な爭鬪の場が考へられねばならぬ、然し時間的生成を根本とする歴史に於て如何にしてこの空間的な爭鬪の場が成立し得るであらうか。其は具體的時間が幅のない直線として流れず帶の如く流れるからである、そしてこの矛盾の辯證法に於ては對立する歴史的存在は時に緊張し、時に爭鬪への待期の態度を持し、時に實際的に爭鬪の狀態にある、この爭鬪は時に新らしき自己を形成もするが、時に對立者相互が衰弱して絶滅するが故に、矛盾對立の辯證法は必らずしも進歩と創造とをもたらすとは限らない、そして當爲を根本とする道德的活動は主として善惡の爭鬪と解せられるが故に矛盾の辯證法はまた教授に於て道德的辯證法とも呼ばれる。

歴史に於ける第三の辯證法は和解或は愛の辯證法である、ここに於ては對立する存在は鬪爭の關係に立つ代りに協同の關係に立つのである、而も其は同時存在の形式をとるものであつて、これこそ社會存在の基礎をなすものであるとされる、矛盾爭鬪の辯證法をして自他の破滅に導かしめぬ爲に、我々は愛の辯證法によつて救ふことを考へねばならぬ、ここに教授に於ける歴史の分散性なる考へが働いてゐるとみられる、爭鬪のみが力を發揮するのではなく、愛にはこれにまさる眞の創造力がある、愛の辯證法は種々の社會現象を規定するものとして働いてゐるが、就中宗教的現

象に於て顯著であるところから其は又宗教的辯證法と呼びうるであらう。

教授によれば右の三つの基本的類型が歴史に於ける辯證法として指示されるのであるが、此等の辯證法は決して夫々純粋な形に於て存するのではなく、全く混和的な形に於てのみ存在するのである、そして歴史過程に於ける全體辯證法は更にこれらの混和的な辯證法よりなる混和的全體として考へらるべきである。

然し歴史に於ける辯證法の歸趨として想像されるものは大なる愛の辯證法であるが、この愛の辯證法は辯證法の歸趨であると共に寧ろその全體である、私は教授の所論を讀了して、教授が體系的思想家でありながら、しかし多くの體系家がさうである如くに形而上學的思辯に溺るるものではなく、現實の事實に對して極めて忠實なることを感ぜずには居られないのである。

第三論文「理想主義の人生觀」に於ては先づ種々な形態の理想主義的人生觀が考察され、ついで教授自身の人生觀の一端が述べられてゐる、そして教授が理想主義的人生觀の最後とするところのものは、他力を主にした自力的理想主義。或は宗教に根ざす道德的理想主義と形容し得るでもあらうか、卽ち教授の人生觀は行爲的倫理的と云ふよりは寧ろ諦觀的宗教的であると云はざるを得ない。あるものからあるべきものへと云ふ熱情ではなく、現にあるところのものをあるがまゝに肯定する諦觀であるやうに考へられる、それは不安を越えて不安を包む安心の境地である。理想によつて「現實が理想を追求せしめられる」とみてゐるやうであり、理想が實現される爲には自我の努力が必要であるとなす單純な倫理的理想主義ではない。ここに我々は教授の深くして平靜な人生觀の現はれをみることが出來る。更に本論文で個性的理想主義と普遍的理想主義の二形態をあげ、前者に屬するものとしてキエルケゴール、ニーチェ等の理想主義や現代獨逸哲學の主流をなす實存哲學の理想主義をあげ、後者に屬するものとしてヘーゲル主義、マルクス主義の理想主義、佛教、キリスト教の世界宗教の理想主義をあげる、しかし教授はこの兩者の何れにも滿足せず、正に教授のとられる人生觀は兩者の中間に位するところの、云はば特殊的理想主義なのである。しかしこの特殊と云ふ言葉の意味内容は極めて伸縮性のあるもので、必らず種々の形態をとり得るものと考へ、教授がこの特殊の下に意味するところのものは、民族主義的理想主義或は國家主義的理想主義であるやうに考へられる。

さて本書の第四、第五論文は標題の示す如く西田、田邊兩博士の哲學に對する教授の立場からの批評である。周知の如く西田哲學と田邊哲學は日本に於ける體系的哲學の最高位にあるものと云つてよいであらう。そして高橋哲學が其の中にあつて特殊な位置を占めると云ふことはここに述べるまでもない。

さて教授はこの二論文に於て、教授自身の立場から勝手に兩哲學を批評し去ると云ふ如きことはせず、極めて用意周到に内在的批評を行ひ、そこから兩哲學の難點を剔抉し、然る後にこのアポリヤを解決するものとして教授自身の立場を提出される。從つて教授の立場に贊同するにしても、しないにしても、我國に於て今日問題となれる西田・田邊兩哲學の批判を求むる人にとつては、本論文は誠に得難き文獻であると共に、又教授自身の所說にも傾

聽に値する幾多のものを發見し得るであらう。

先づ西田哲學については西田哲學の地盤、西田哲學の根本構造、西田哲學の內在的批判、及びその超越的批判等に分けて論ぜられる。そして我々はこの批判を通じて教授自身の立場を可成り端的に知ることが出來る、教授は常に存在をば體驗に引きもどして考へて居り、體驗と存在とは高橋哲學に於て常に緊密に結びつけられてゐる。其は所謂體驗存在論とも評すべきであらう。ところが西田哲學に於ては正にこの存在と體驗との連繫の緊密さが幾分缺けてゐると云はざるを得ない、存在を體驗に引きもどして檢證すると云ふことは西田哲學に於ては困難の如く考へられる、この意味で教授は、西田哲學は體驗存在論ではなく、存在論であると斷定するのであるが、其は蓋し西田哲學に對する適評であるであらう。要するに本論文は西田哲學を體驗と云ふ角度から批評したものであり、西田哲學を體驗と連絡しやうとするところに教授自身の哲學の立場がみられると云へるであらう。

田邊博士は昭和七年の論作『圖式「時間」から圖式「世界」へ』を最初として、「社會存在論」（昭和九・十年）「種の論理と世界圖式」（十年）「論理の社會存在論的構造」なる一聯の論文に於て、所謂氏の絕對辯證法の立場から社會哲學・社會存在論の研究に向はれた。本書に掲載される「種の論理について」は右の一聯の諸論文に展開された田邊博士の思想に對する批評である。なほ田邊博士の種の論理については務臺理作博士の「社會存在論に於ける世界構造の問題」（哲學論叢第五輯）及び高橋教授の批評に對して田邊博士の答へられた「種の論理に對する批評に答ふ」（思想十二年十月）とを合せ讀むならば、今日の日本哲學界の歸趨を概觀することが出來るであらう。

田邊博士の「社會存在の論理」に於ては「社會存在」よりも「論理」の方に重點がおかれてゐたと思はれる。卽ち社會は論理を通じてみられてゐた。あくまでも、論理が主で社會は從であつた。又論理と實在との關係は否定的媒介であり、實在は論理の外側にあつて、外側から論理を制約するものではないとされるのであるが、高橋教授は論理が事實を決定するのではなく、却つて事實が「論理を決定する」とみてゐる。確かに事實は論理を以つて決して汲み盡されるものではなく、社會も亦論理以上のものである。論理の世界を先に築いて、其によつて社會をみても、社會そのものは把握され難いのである。ここに田邊・高橋兩博士の根本的相異點があると云ひ得るであらう。一は「上からの哲學」であり、他は「下からの哲學」である。私は前に高橋博士の人生觀について、其が行爲的であるよりは寧ろ靜觀的であるとしたのであるが、ここにも其の基調があらはれてゐるのである。田邊哲學が實踐の哲學、行の哲學とすれば、高橋哲學は靜觀の哲學、觀想の哲學であると云ひ得るであらう。

教授は本論文に於て辯證法には二極的と三極的とがあるとし、三極的辯證法にはヘーゲルに於ける概念の辯證法、キリスト教に於ける三位一體、佛教に於ける三諦圓融等をあげて居る。そして田邊博士の種の論理も全と個と種の絕對媒介を說く限り三極的辯證法の構造を有すると主張する（此に對する田邊博士の反駁があるのであるが今は問題とすべき時でない）ところで二極的辯證法

にあつては矛盾對立の側面が强調されるのであるが、三極的絶對媒介に於いては矛盾對立は鈍磨され、其の代りに和解が成立する本來の意味に於ける矛盾對立は二つのものの間に於てのみ存するのであり、これに第三のものを加へるときは矛盾對立は其だけ尖鋭さを減少する。從つて二極的辯證法から三極的辯證法に移ると云ふことは矛盾對立を緩和することであり、この三極的媒介が絶對的三極的媒介にまで完成される時は矛盾對立の辯證法は和解の辯證法に止揚されるのである。而して和解の辯證法は宗教的和解が和解の類型的なものなるが故に、宗教的辯證法又は愛の辯證法と呼ばれるのである。教授が何故にかかる愛の辯證法を考へるに至つたかについては、結局教授の體驗的要求からと云ふより他にないであらうか、然し教授の考へ方をどこまでも徹底せしめるならば、其は敢へて辯證法と呼ぶべき理由はなくなるのではないかと考へられる。

更に教授によれば種の論理に於ける否定卽肯定、肯定卽否定は一見同時的の如くであつても實は異時繼起的である。其は肯定から否定への、又否定から肯定への轉換に他ならない。そして轉換は異時繼起的なるものの間に行はれるより他ないものであつて、其の限り轉換は一方向的と考へねばならぬ。從つて肯定卽否定、否定卽肯定の統一は兩者を同時的に、從つて高次の靜止に於て包越したものでなければならない。此が卽ち教授の云ふ體系的なものなのである。

要するに西田・田邊・高橋三氏の根本的立場の相違は結局次の如く要約出來るかと思ふ。卽ち西田哲學が場所的辯證法或は無の辯證法であり、田邊哲學が種の論理による絶對媒介の辯證法と云ひ得るに對して、高橋教授の立場は、教授の言葉によれば包辯證法の立場である。ここに教授の所謂包辯證法の立場とは辯證法を包越するものの立場、具體的體系、高次の靜止の立場を意味する教授の具體的體系とはすべての活動をそのままに包越するところの高次の靜止としての全體的存在なのである。西田・田邊兩博士の哲學は要するにヘーゲル的であり、此を歷史的社會的現實に具體化せんとするの試みである。ヘーゲルをヘーゲル的に超越しやうとするもの、其が西田・田邊兩博士の哲學である。これに對し高橋教授はヘーゲルを超越するの他の新たな道を本書に於て提出したと云ひ得るであらう。只私は高橋教授の包越の概念が、教授が有限的人間存在の分析に止まり得ず、有限存在の外に絶對無限者を考へるところから、ヤスデースの所謂包括者の概念に相通ずるものあることを附記して蕪雜な紹介の筆を擱きたい。（宮崎友愛）

## 支那考古學論叢（梅原末治著　弘文堂發行）

考古學者として著者は誠に我國の世界に誇るべき最高峯の一人である。著者が最近學位を得、教授に昇進せられたるも實は遲きに過ぐと云ふ感無きを得ない。本書は氏が最近十年諸學術雜誌に掲載された支那考古學に關する諸論文中主として青銅器、殷虛出土物等に關するものの一部を蒐錄したるもの、本書によつて吾人は支那考古學の進步の道程を辿ることが出來る。諸雜誌に發表せられ吾人の座右に備へ難かつた各篇が一括して容易に利用し得る